

山形大学附属博物館報21

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY 1995. 3. 1

目 次

- 文化財の保護 穴 戸 直 (1)
医学の博物館的考察——病理学の立場から—— 今 井 大 (2)
地学系博物館、理学部での実験教育のことなど 大 場 与 志 男 (3)
資料紹介——船 草 笥—— (4)
平成6年度事業報告 (6)

文化財の保護

館長 穴 戸 直

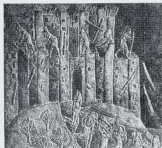
茨城県の北東、福島県の境に近く、海に面して「五浦(いづら)」がある。この地は、回舎天心が米国から帰国後、自ら住み、やがて日本美術院の本拠地としたところである。横山大観、下村観山、菱田春草もここに移住、研究所も建設され、天心が没するまでこの地で美術院の活動が行われた。現在は、茨城大学の美術文化研究所になっている。天心が書を読み、思索に耽った六角堂は、海に突き出た岬の突端、太平洋の波が潮を洗う崖の上にある。

この施設の一角に、ラングドン・ウォーナーの像がたっている。彼は天心に師事し、フェノロサ、天心、日本美術研究、ボストン美術館東洋部の結びつきの中に連なった東洋美術研究者であるが、その関係のみで、この地に彫像がたっているのではない。彼、ウォーナー博士は、太平洋戦争中、日本の重要文化財のリスト、いわゆるウォーナー・リストを政府に提出し、B29による焼夷弾攻撃の対象から、奈良、京都を救った人だからである。この日本文化の理解者がいなかったならば、奈良、京都の寺社をはじめ多くの文化財は壊滅していた

に違いない。今日、一寺の建物の再建でさえ、それに必要な木材は、もはや国内では求められない。葉師寺金堂の再建には、台湾の材が用いられたと記憶している。わが国で自給できるのは伊勢神宮だけである。

排仏脱釈の動きのなかでおろそかにされた仏像を、フェノロサは調査し、その重要性を指摘し教えてくれた。天心から学んだウォーナー博士は、二都を戦災から守ってくれたのである。

そもそも人類は、戦争を始めれば、その文化までも破壊して止まなかった。多くの文化財は灰燼に帰し、姿を消した。勝者の記念碑はそれを後世に示している。アッシリアの軍の進軍した後には、亡骸と腐殖しか残らなかったといわれるが、アッシュールバニパルの宮殿から発見された「ハマヌ



〈ハマヌの街の描写〉部分

の衝の掠奪（ブリティッシュ・ミュージアム蔵、浮彫）は、破壊し、火を放ち、掠奪する、戦の終末を表現している一例である。フォーロ・ロマーノの一端にたつティトゥス帝の記念門には、イスラエルからの分捕り品、ユダヤ教の見事な燭台を担いで凱旋するローマ軍の浮彫がある。戦争は情容軟く敵を破壊する。原子爆弾は日本の二都市のすべてを焼き尽くした。

そのような戦争の論理のなかで、「日本の文化財を戦災から守らなければならない」と主張することは、まさに「大変なこと」であったに違いない。全く逆の場合、日本の学者が政府や軍部を説得できたであろうか。敬意と感謝あるのみである。

大戦後、世界の人は、人類の文化財を守らねばならないと考えるようになった。たとえ、国家体制、イデオロギー、民族が異なり、国益が一致しなくとも、貴重な文化財を次の世代に無事伝えなければならない、と思い始めたのである。国際的な、グローバルな立場で、文化財の保護に組織的に動きだしたのは、1945年に発足したユネスコである。その活動で記憶にのこるものは、エジプト、アブー・シムベルにあるラー・ハル・アクティ神殿の移転工事である。エジプトが近代国家として発展するため、当時のナセル大統領は、ナイル河に発電・灌漑のための大ダムの建設を計画したが、米国の援助をえられず、スエズ運河国有化を宣言したために紛争も起り、必ずしも国際的環境は平穏ではなかった。エジプトはソ連の経済・技術援助のもとに、ナイル河に発電、灌漑のためのアスワン・ハイ・ダムの建設をおし進めることとなった。しかし、その建設によって神殿は水没する。これを救う手立てはないか、エジプトの近代化と人類の文化財の保存の二つを達成する方法はないか、ユネスコが中心になり、各国の学者、技術者を集めての調査・研究が開始された。その結果、岩山を掘削し彫ってあるこの大神殿をそのまま移動することはできないので、ブロックにカットして移動し組みあわせることとなった。それでも、大工事、大難行に変りなかった。ユネスコが唱道して、各国でエジプト美術展を開催し、収益をその費用にあてることとなった。日本では、東京国立博物館と朝日新聞社の主催で、東京、京都で「エジプト美術五千年展」が開かれた。1963年のことである。神殿は1968年、水没しない高所に移動、再建された。



ラー・ハル・アクティ神殿 アブー・シムベル

これは、ときに利害相反し、反目しさえする各国が、人類共通の文化財を協同して保護しようとする意識に目覚めた画期的な出来事であった。社会の変動の激しい今、経済効率優先に考えられがちな現在、われわれは、次の世代に無事伝えるべきものを思慮なく破壊してはいないだろうか、よく考えるべきときであろう。（人文学部 教授）

医学の博物学的考察

—病理学の立場から—

今井 大

われわれが現在、病理標本作製時に最も一般的に使用しているホルマリン固定液ならびにH・E重染色がいつ誰によって創案されたのか？

病理学が観察技術とともに進歩してきたことを博物学的立場から90年代の病理学を展望してみたい。

エジプト医学では死体の保存にあれほどの技術と経験をもっていたにもかかわらず、彼らの解剖学的知識ははなはだ貧しかった。まして彼らの病理学にはさしてみるべきものがなかったように思われる。ギリシャ時代に入ると、医学が行きづまった場合に、古今きまってもち出される言葉「ヒポクラテスに帰れ」といわれるほど名声を馳せたヒポクラテスが現れた。彼は哲学的支弁は医術にとっては何の関係もない、と主張した。当時の自然哲学者たちの関心が宇宙論から生物論へと移って、観念的、演繹的思考をも医学にもち込もうとした。ヒポクラテスはそれに強く反発し、医学的知識は医術の実践から経験的に求められなければならない、と彼の考えを一貫した。科学者ヒポク

ラテスの立場は、原理から話をもっていく哲学者のものとは明らかに違っていた。それが後世まで医学の主流となった体液説であった。今日の言葉で言うならば、人体は外界に開放した開放系として捉えた。その点ヒポクラテスの病理学の考え方には特筆すべきものがあった。ヒポクラテスの自然観の観察より生まれた液体病理学に対し、アレキサンドリヤのヘロピオスとエラスストラトスらは液体病理学をしりぞけ、解剖学の立場から人体は分割できぬ粒子アトムから成ると考えた。この考えが固体病理学の発端となった。ここにギリシャ医学の二本柱と見做される液体病理学と固体病理学とが開花し、その後の病理学の病因論争の出発点となった。まず、これら二説を見事にしめくったのはギリシャ時代最後の医人ガレノスである。彼は自ら正統ヒポクラテス主義もって任じていた。しかし解剖に精通し、また生理学をそれなりに弁えていた。その学識がヒポクラテスの体液説と固体病理学説とを繋げるといった偉業をなし遂げさせたのである。その後中世から近世にかけてガレノスの医学体系が永く医学界を風靡した。彼の意に反しヨーロッパの医術の硬直化へと進むのであるがそれは時代的背景のためであってガレノスの責任ではない。人体解剖が再会されはじめたのはルネッサンス期に入ってからである。しかし、当時の解剖は系統解剖に主力がおかれ、病変の記載がほとんどなく、その多くはいわば通りすがりに言及されたにとどまっていた。

18世紀に入ると近代病理学の開拓者モルガニーが輩出した。解剖こそが病気の「座」と「原因」とを正しく認識する方法であると彼はしている。彼のいう座と原因について「解剖学よりみた疾病の座と原因について」（1761年）を書き、病気が解剖学的局在性をもつことの理論的基礎を与えた。ここにおいて疾病の全身疾患として捉えてきた疾病論に対し、臓器として捉える新しい見方が出来るようになったわけである。さらにこの思想はビシャによって引き継がれた。ビシャは疾病の場合は身体器官の組織部分にあると考え、組織という考えを1799年初めて提出した。さらに疾病の本態への追求がなされた。それは解剖学の延長としての諸器官の微解剖学ともいべき研究分野であった。それを促したのは顕微鏡の発明と標本製作技術の進歩であった。レーフェンフックがレンズの拡大鏡（ライデン博物館蔵）を発明してからも、暫く

顕微鏡は病理学とは無縁であった。しかし、1838年複合顕微鏡が製作されて、その性能が向上した。プールのキニエが多くの貴重な発見をしたのは性能のよい顕微鏡をより早く入手したことによる。また顕微鏡の性能向上に伴って標本製作の技術も進歩した。まずマイクローム（大英博物館）が改良され病理学分野でも利用出来るようになり、顕微鏡標本をより薄く、より美しくつくるべく努力が払われた。次いでいろいろな固定液が開発された。今日病理で日常用いられるホルマリン固定は、1893年フランクフルトマインのブレムの創案である。また、現在でも標本染色の主座を守り続けているヘマトキシリン・エオジンはそれぞれ別々に見出され、1870年代に早くも重染色として確立した。このような技術発展を背景として生まれてきたのが現代病理学でも優位を占めているウィルヒョウの細胞病理学説である。ウィルヒョウ以前にも動物の単位が細胞であることがシュヴァンによって記載されている。ただ細胞の生成において両者の考えに差異を見る。シュヴァンは細胞外にある細胞間質が素材となって発生するとしている。これに対しウィルヒョウは「すべての細胞が細胞から」*Omnis cellula cellula*と主張した。

19世紀の後半において、検索方法がメスとピンセットだけをたよりにした病理解剖学から、新しい技法の開発による顕微鏡的観察方法を背景として細胞病理学が生まれた。それが20世紀の病理学の主流をなしてきた。ときまさに21世紀にならんとする90年代での疾患を分子レベルで考えようとする分子病理学の台頭は、医学の方法論の歴史的発展からみると、当然の流れと言えよう。

(医学部教授
附属博物館運営委員)

地学系博物館、理学部での 実験教育のことなど

大場 与志男

国内外の博物館を意識して見て回ったわけではなく見聞は広くないが、越外国の例を引合いにするとまでもなく、わが国の大学のもっとも貧弱な面の一つは博物館相当の施設であろう。地学系学会の会員名簿に附記されている、「日本の主な科学

博物館など」を見ると、300ほどの地学・自然史関係に限ったリストではあるが、公私大学の博物館は次の11である。

帯広畜産大学付属環境畜産学研究所生物部
北海道大学付属臨海実験所博物館
秋田大学鉱山学部付属鉱業博物館
山形大学付属博物館
國學院大学考古資料館
明治大学考古学博物館
信州大学教育学部付属志賀自然教育研究施設
東海大学(自然史・海洋科学・人体科学)博物館
南山大学人類学博物館
京都大学理学部付属瀬戸臨海実験所水族館
宮崎大学農学部農業博物館

記載もれ、新規の施設があるかも知れないが、他に較べて圧倒的に少ない。山形大学の博物館は確かにリストにあり、秋田大学鉱業博物館とともに、例として出され評価されている。しかし、山形大学では、博物館が図書館に隣接しており、内容の不十分なことはご存じの通りである。独立した博物館の構想を打ち出す機運にあるが実現は難しい。大学博物館が冷遇されている背景には、日本の科学の生い立ちや、技術優位の背景があると考えられる。専任の研究者や職員を置くことの困難さは、さらに大学博物館の存立を阻止している。

一方、県や市などの設立した博物館は、建物でまず圧倒している。最近、ある学会の時に知った福岡市立博物館は、内部の様子まで見ることは出来なかったが、ゆうに100m平方以上の敷地に壮大な本館をかまえていた。北海道の開拓記念館なども威信にかけた様子が判る。

博物館は大学の顔であり、エンタイクロベディア的な役割を果たさねばならない害である。

振り返って理学部を見ると、日常の実験・実習も学生数が多いこと以外は、無い無いづくして、理想の教育とはほど遠いものである。学生の野外実習指導費が12人の教員と1学年32名の学生に対して年わずか数万円である。機械の保守や実験の準備・実習の補助をすべき教務職員・技官に至ってはゼロである。最近、大学院生のT.A. (ティーチングアシスタント) が認められたが、とても上記の渴をいやすには至っていない。

岩石鉱物や化石などの保管場所としてのわずかな標本室は、新しく入る機械などにスペースをうばわれている。図書館と同等の規模の博物館があ

り、標本とか資料も完備していたならば、意欲をなくして落伍する学生の一部は救われると思っている。理学部で計画した、裏磐梯の野外教育実習施設が沙汰止みになったのは残念である。

理想の例え話であるが、学生の岩石学実験は博物館の実験室で行ない、そこには、人数分(1回の授業は25人どまりか)の顕微鏡と、各種の岩石・鉱物標本が置いてあり、別に薄片製作室があり、技官がいる。そんな環境が欲しいものである。

地学系の大学博物館としては秋田大学に鉱業博物館があるが、他大学では貴重な岩石鉱物あるいは化石標本の保管状態が極めて貧弱である。大学ではないが、つくば市にある工業技術院地質調査所の博物館(標本室)はほぼ理想的である。また、体鉱山には何ヵ所か、坑道を利用した施設と鉱石など展示する博物館を持つものがあり、鉱山の学習ができる。近くでは、宮城県黒川鉱山跡のマインパーク博物館が一例である。また、学術的な火山博物館は、東京都大島の場合が充実しており、箱根、阿蘇、有珠などにも設けられている。これらは、観光施設の役も負わされているようであるが、あるレベルの学術的な博物館の役割は果たしている。

公開講座・生涯教育など、社会に開いた大学がさげばれている改革の時期でもあり、大学博物館の充実を切望して止まない。

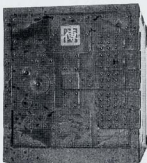
(理学部 教授)
(附風博物館運営委員長)

資料紹介

船 箆 筒

本資料は、悪悪と言われる船箆筒の一種です。高さ42cm・開口36cm・奥行44cmの箱型をしています。外側に漆塗りの櫛材を使い、内側に桐材を使用しています。船箆筒の正面全体が左開きの扉になっています。また船箆筒の上面には鉄製の握手金具が付いていて持ち運べるようになっています。内部には5つのひきだしが付き、右下のひきだしの裏にかくし箱が仕込まれています。また、内部左下と右下のひきだしと正面の扉には鍵がかけられるようになっています。

この船箆筒を一番特徴づけるものは、外側にほ



どこされた装飾性の強い鉄金具です。船箆箱を補強するように付けられた縁金具や扉一面の飾金具です。本資料は、懸視の金具の配置としては最も一般的な十文字型に分類されます。扉の中心を左右に区切るように縦に帯金具が付き、その上と下には枠があり、上の枠には箱に傳の文字、下の枠には透彫の松の金具と、それぞれに意匠が凝らされています。左側には蝶番、右側には錠前がそれぞれ付いて、錠前の上には松、下には竹の透彫金具が付いています。また扉の四隅には松の葉を型どった隅金具が付いています。

これは、船箆箱という名前から推察できますように、江戸時代から明治20年頃までにかけて千石船や弁財船の中で使用されました。船の備品ではなく船頭個人の持ち物で、一種の金庫であり必需品でした。

この中には、納税義務のある船の所有者が役所から交付された、公の航行許可証であり納税証明書である船鑑札や、船頭が所轄の浦役場に申請して、各藩の番所に宛て通行を許可してくれるように記した一種のパスポートである船往來手形、積み荷に関する書類である送り状・売買仕切などが入っていました。航行中の船頭は常にこれらを携帯しているように義務づけられていました。一回の航海で扱う荷物の金額は多い時で千両にも及ぶ場合がありますから、これらの荷物を管理する船頭には非常に重い責任があったのです。そのため、航海を続けていくために必要な品々が入っている船箆箱は船頭にとって最も重要なものでした。

また、航海は常に海難事故と背中合わせで、一端離船となると直ちに船頭は浦役人に船往來手形と送り状を改められました。これらを紛失すると罰せられたのです。そのため、海難事故の際に船

頭がこれらの重要書類入れである船箆箱ごと、必死になって持ち出した様子が浦証文（海難の折に最寄りの浦で船頭が浦役人から受ける海難証明書）に生々しく記されています。

そして、船箆箱には海に投げ出された時に沈まないような工夫があります。それは外側を榲材、内側を桐材というように異素材を使用している点です。桐材は、多孔質で水分を急激に吸収し膨張するという性質を持っています。一方漆塗りの榲材は水に濡れてもそのままなので、内部の桐材が水を含み膨張することによってすきまをしっかりとふさぎ、それ以上の水の侵入を防ぎ、内部の空気によって沈まないのです。船箆箱を実際に手に持ってみるとわかるのですが、ずっしりと重い手応えがあります。これだけのものが沈まないということに、先人の知恵と技を感じずにはいられません。

この船箆箱の地域的分布は、日本海側の北陸を中心とした地域に集中しています。そして、柳宗悦氏は船箆箱の三大産地として新潟県佐渡島的小木、山形県の酒田、福井県の三国を挙げています。酒田市には現在も船箆箱を造っている店が一軒だけ残っています。この三ヶ所はいずれも北前船の大きな寄港地でした。北前船は日本海側を航行し上方と北海道方面との交易に従事していました。船箆箱と北前船とは密接な関係があるといえます。船箆箱が使用された時期と北前船が隆盛した時期がほぼ一致するのです。もちろん、船箆箱が船上で使用されたからですが、船の備品ではなく船頭個人の持ち物であったという点が、今日私達の知るところの装飾性の強い豪華な船箆箱を出現させたと言えるのではないのでしょうか。

と言いますのは、北前船の多くが買積船で、船主が自分の資金で物資を買い入れ運んで行って売り捌くという、いわば動くマーケットでした。ですから、他人の物資を運搬して運賃だけを稼ぐ運賃積とは比較にならないほどの利益がありました。同じ船頭としての収入も買積船と運賃積船では大きな差があったのです。このような背景の中で船箆箱は発達していったと考えられます。莫大な金を手にした船頭達が、金に糸目をつけずに人より立派な、豪華なものを求めていった結果が船箆箱の通飾性として現れたのではないのでしょうか。

そして、当時の廻船問屋と船頭の関係も影響していたと思われる。問屋には港に運ばれる商品

の売買に関して独占の特権が与えられていました。ですから、船頭と問屋の関係は密接で、船頭は取引先の問題に悩まることが普通でした。商品取引に関する話し合いの場合は通常は問屋でしたので、船宿を兼ねた問屋も多くありました。その商談の場兼宿泊所に船頭は必ず船筆筒を持参したでしょうから、船筆筒の質がその船頭の経済的背景を示し、商売上の信用を得るために役立ったであろうことは想像に難くありません。以上のような要因があって船筆筒は装飾性を始め、現在私達が目にするような形になったと言えるのではないのでしょうか。しかし、明治20年代に入り、北前船が衰退していくのにもない船筆筒も運命を共にして姿を消していくのでした。(附属博物館 曾根信子)

平成6年度事業報告

平成6年度、本館で実施した博物館実習の参加人数は総数132名でした。図書館の増改築工事で博物館が閉館となることを考慮し、例年の実習とは異なり、132名を3班に分け、初日のオリエンテーション・本館見学等を3班合同で、その後は1班ごと毎週土曜日各2回、そして最終日の見学実習を合同で、という形式となりました。

実習期間・学部別の内訳は下表のとおりです。

	人文学部	理学部	教育学部	計
第1班 5.14 5.21 5.28 11.19 (毎土曜日)	14	11	20	45
第2班 5.14 6. 4 6.11 11.19 (毎土曜日)	16	4	20	40
第3班 5.14 6.18 6.25 11.19 (毎土曜日)	27	14	6	47
計	57	29	46	132

なお、今年度の公開講座と特別展は、会場の都合がつかず中止となりましたが、平成7年度の公開講座は、「博物館に遊ぶ」というテーマで、楽しめる博物館を一般市民の方々に認識してもらえ

るよう体験学習による講座を企画しています。また、特別展は、昨年度に修復され、往時の輝きを取り戻した絵画や歴史資料を中心とした収蔵品展を予定しています。

平成6年度の博物館は、新生を前に変革の一年でした。図書館の増改築工事に伴い、博物館展示室・事務室はこれまでの図書館3階の西側から、東側へ移転することになり、昨年の7月から博物館展示室を閉館とし、展示品・収蔵品の梱包作業を始めました。11月中旬、先に完成した2階部分に、一時的に事務室と梱包された資料が引っ越し、現在に至っています。3階部分の工事が終了し、最終的な移転は2月中旬の予定ですので、新しい展示室のオープンは、4月上旬を目標に準備を進めているところで。(附属博物館 高橋加津美)

平成5年度見学者総数

一般成人	個人	645 (人)
	団体	42
大学生	個人	510
	団体	125
児童・生徒	個人	2
	団体	96
合計	個人	1,157
	団体	263
	総数	1,420

編集後記

館報21号に原稿をお寄せいただいた今井教授は、博物館の運営委員として、特に昭和54年9月から56年7月までは運営委員長としても、長く本館の維持・発展にご協力くださいました。この3月末に定年ご退官を迎えられる今井教授に感謝の意を表したいと存じます。

また、理学部安部 守教授は、長年、運営委員会委員、学芸研究員を務められ、さらに公開講座、博物館実習、特別企画展等、本館の活動にご尽力を賜りました。定年ご退官に際し感謝の意を表したいと存じます。

山形大学附属博物館報 A21 1986. 3. 1 発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
(〒990) 山形市小川町一丁目4-12
(TEL) 0236-28-4930 (直通)